

はっはっは、と楽しげに笑う薬研はまっすぐに気持ちのいい男だ。この本丸の最古参の一振り。ふと思う。

「この本丸も大きくなったわよね」

「ん、そうだな」

座り込み、卓の上にあった煎餅をかじりながら薬研は返す。

「始めのうちはこんなに食べ物で困るなんて思いもしなかった」

「はっはっは、俺たちに旨いもんを教えたのは大将だろがよ」

人情というものだ、と弁解しそうになって余計なお世話という言葉が脳裏をかすめる。せつかく人の身を受けたのだから人間の体を持って楽しめることは楽しんでほしかったのだけれど、私が人並みに知っている楽しみと言えれば食べることくらいしか思いつかなかったのだよな、と。

格が高くはないといえ、神様に楽しみを教えることは傲慢ではなかったか。恐れ多いことではなかったか。いろいろと考えてしまう。

「たしいしょ？」

気付けば薬研が私の顔を覗き込んでいた。言うまでもないが薬研の顔は儂い詐欺だと言いたくなるくらいきれいだ。このきれいな顔で豪胆なことをしてしまうのだからこちらは心臓がもたない。

「秋田はどうも釣りをお気に召したようだな」

私の心の平静のため、少しだけ薬研と距離を取って

続きを促す。

「もつと釣りたいて言ってたんだが、食える量だけにしとけて止めといた」

大将が命を大事にしろって言ってたذار。

薬研はそう言うてにつこりと笑った。ああ、人としての倫理を教えたこと。少なくとも薬研にはお節介ではなかったらしい。強張りかけた気持ちがほぐれてゆく。

「歌仙が南蛮漬けを作るなら、久々に私がお味噌汁作ろうかな」

そう言うとその場にいた男士たちが一斉に喜びの声を上げる。

「歌仙の方がお料理上手でしょうに」

「人間の料理は霊力が入るからな」

そうなの？ と薬研に尋ねれば大きく頷かれた。

「歌仙や燭台切の料理は確かに旨いが、俺たちみいんな、大将の料理を心待ちにしてんだぜ」

そっか。そうなのか。なんだか嬉しくなってしまう。

「じゃあ厨に立つ頻度を少し上げようかなあ」

いいねえ、と薬研は顔をほころばせた。

《了》

「まあ二百ほどは釣ったか。今、厨で歌仙が発狂している」
歌仙が小さな鱈をさばきながらキリキリしている様がありと目に浮かび、思わず笑ってしまふ。笑ってから、じゃあ、と薬研に言ってやる。
「薬研もさばくの手伝ってあげればいいのに」
「始めは手伝っていたんだがな」
「どうやら大雑把な包丁遣いに、これまた歌仙がキリキリらしい。賑やかな本丸だなあと思う。いつも賑やかで楽しいと思う。」
「なら歌仙には頑張ってもらいましょう。あとで労いにお菓子でも持っていきようかな」
「ああ、そうしてやってくれ」

「大將！今夜は鱈の南蛮漬けだぜ！」
ほぼ全ての男士たちに非番を与えていた日。部屋に入りてくるなり薬研藤四郎は、他の男士たちとのんびりテレビを見ていた私にそんが放った。
「あら、よく知ってるのね。でもそんな大量の鱈なんぞどうしたのかしら」
「さっきまで秋田と釣りに行っていな」
なんでも遊びたがっていた秋田藤四郎を海に連れ出してやって、秋田が磯遊びをしている傍で釣り糸を垂らしたらしい。爆釣で面白くように小さな鱈が上がり、どうせなら夕餉に加えてもらおうと秋田にも手を渡して一緒に釣っていたんだぞうだ。

佐藤ごおり

命を食べろ

薬研藤四郎十女審神者



お読みいただきありがとうございます。
「薬々に」というよりは「薬十々に」みたいなお話でしたが、楽しんでいただけましたら幸いです。
このお話は『いただきます！〜付喪神様のお食事〜』という同人誌の一編です。刀さばに（というか刀十々に）詰め合わせのおお願いですので興味があればぜひよろしくお願いのQRコードは匿名で送れる感想アソビです。よろしければ感想ください。

発行：2021.05.02 佐藤ごおり@ice13g